

「神話と流刑の島」 隠岐紀行

荒濱 茂

一、はじめに 昨年四月島根県隠岐郡西ノ島町の関係者の案内を得て、同島に約八百年前頃に築かれた「牧畑合垣」の実踏が縁となり、同地方に旅を重ね、「隠岐」が「流刑の島だった」との知識はあったものの、足を運ぶに伴い、古代からの歴史が現代にも息づいている印象を強くうけた。そこには尺度の異なる文化の重みさえ感じた。

二、隠岐の位置 島根半島の北方約四十kmから六十kmの海上に浮ぶ二つの島嶼を合せて「隠岐島」と呼ぶ。本土に近い島を「島前」、それより東方海上の島を「島後」と通称されている。「島前」は「西ノ島町」(約三、六〇〇人)、「海士町」(約二、四六〇人)、「知夫村」(約七〇〇人)の二町一村で形成されている。「島後」は町村合併により「隠岐ノ島町」(二六、七〇〇人)一町である。島の面積は二四三km²、外周一五一kmと「島前」より格段に広い面積を有しているが、それは「島のなりたち」由来している。



後鳥羽天皇火葬塚

三、隠岐のなりたち 「隠岐」は火山活動期の約二万年前の「ウルムチ水河期」の頃に爆発、隆起、沈降を重ね形を変え現在の島になった、という。「島後」の場合、その証しを爆発により形成された外輪山にも等しい屹立した岩礁を東方海上に見ることができ、し、「島前」の場合も同様で、元来一つの島だったのが爆発により「中ノ島」(海夫町)、「西ノ島」(西ノ島町)、「知夫里島」(知夫村)に分離したことが地質学的に証明されている。また「縄文、弥生時代」

に武器や生活用具として活用された「隠岐黒耀石」は有名である。因みに「隠岐火山」は北朝鮮の「白頭山火山帯」に属し、大陸との関連を物語っている。

四、隠岐の呼稱 「隠岐」の表記は国造時代(六四五頃)は「意岐」、聖武天皇の天平時代(七二九)は「隱伎」延喜年間(九〇一)以降現在は「隠岐」に定着している。尚伝承には「天照大神」が「美しい御木がある」と言われ、昔は「御木島」と呼んだそうである。

五、隠岐の支配 領国支配が明らかなか中世以降を示すと次のとおりである。

建久四年(一一九三) 近江国寺守護職「佐々木定綱」隠岐地頭に補任。戦国時代「尼子氏」の支配下にあつたが天正十年(一五八二)同氏滅亡。次の支配は「毛利氏」に移る。「関ヶ原役」の戦功により慶長五年(一六〇〇)堀尾吉晴が出雲、隠岐二十四万石国主となり、慶長十六年(一六一一)「松江城」を築城。三代「忠晴」寛永十年(一六三三)「無嗣子」により、堀尾氏断絶。同十一年「京極忠高」入封、同十四年病没により除封。同十五年「松平出羽守直政」信濃松本より出雲十八万六千石「松江城主」として移封され、以来版籍奉還時の「十代定安」まで松平氏が治める。

尚「隠岐一万八千石」は松平氏が移封時に「預り地」となったが、貞享四年(一六八七)より享保五年(一七二〇)までの三十三年間は「天領」となり「大森代官所」支配。その後再び「松平氏預り地」となった。

六、隠岐の文化財 文化財は島後の「隠岐ノ島町」に集中している有形、無形民俗文化財、建築物、考古資料等「国重文指定」を受けているのは十四ヶ所(点)で、県指定に至っては二十二ヶ所(点)がある。隠岐で目を引くのは「神社の多い」ことであり、その数一五〇社余と聞いている。重文の一部を挙げると、

(A) 玉若酢命神社 神名帳に載る式内社で随神門と本殿(隠岐造)は国重文。

風信

○毎日のニュース・気の滅入る事が多かったが「アメリカ・オバマ大統領のニュース」は、大歓声でした。アメリカと日本とは双方に方針の違いはあるにしても、双方一歩ずつ明るい平和な社会を造るよう、お互いに意見を交換してゆかねばならぬ事でありましょう。

○一月十三日(火曜日)午後二時半より上長崎小学校四年生の郷土史実地研修会講師に招かれ出席、教室で野中校長先生も一緒に生徒さんたちと話をした。大変にぎやかで楽しい研修会だった。皆さんより「よい勉強会でした。」と言われた送別の言葉は、うれしかった。

○今年の大寒入りは二月二十日であった。寒修行、寒稽古の記事は読みましたが、いなり修行や、吼喊の記事はありませんでした。時代は変わりましたが、「火炊き竹」、「仮装」のお客さん、「モットモ・モットモ」のかけ声の習慣。これも長崎にはなくなりましたね。

○中国の旧正月の行事(元宵節)を上手に利用された「長崎ランタン・フェスティバル」。観光客が少くなる長崎の冬の行事としては、年を追うごとに大成功でした。新天地を中心にした異国風の料理、眼鏡橋を中心にした川面のランタンの美しさ、各種の催物、どれを取っても寒さを忘れて出かけてしまうのです。だいたい前の事になりますが、元宵の夜(二月十五日)崇福寺に出かけましたら、潘代表より台所によばれて「今夜ね、生姜湯を飲むと幸福が来るよ」と言われて、甘いお茶を戴いたことがありました。

○先日、来客あり「来年はNHKTVで坂本竜馬があり、長崎で何か新しい食べ物を考えて下さい」と言われる。私は、亀山社中のすぐ近くに文久三年日本で最初に開業した西洋料理専門店「良林亭」があつたので「竜馬が食べた西洋料理を考えた」と言ったら「その料理名を教えてください」と言われた。

○平成二十一年「ながさきの空」第二十集発刊いたしました。平成元年第一集を発刊して以来、本年度第二十集となりました。お読みになりたい方は、本会事務局、または十八銀行各支店でお受け取り下さい(無料)

○本会主催の「長崎学を学ぶ会」は三月毎週・月曜十時半より、「古文書を学ぶ会」は三月三日(火)、十七日(火)の二回午前十時半より(会場・本会会議室)。自由参加・無料(資料代各自)

(B) 水若酢命神社 式内社で隠岐一の宮・本殿(隠岐造) 国重文
(C) 驛鈴 隠岐国造の末裔で社家「億岐家」に伝承 国重文
他に「国分寺蓮華会舞」や、大陸との交流の影響といわれる「四隅突出古墳」などがある。

七、「流刑の地」だった隠岐 隠岐が「遠流の地」に定められたのは聖武天皇の神亀元年(七二四)からである。配流、流刑者については「流人百話」「隠岐の流人」「隠岐、流人秘帳」等の研究がある。次に主な配流者をあげる。

(A) 小野篁 平安前期の学者で歌人、遣隋使、小野妹子の子孫、承和五年(八三八)遣唐副使の時、正使藤原常嗣と争いを起し現在の海士町那久の地に配流、同七年赦されて帰京以後累進す。
(B) 後鳥羽上皇は、承久三(一一二二)年、執権北條義時と争い(承久の乱)、隠岐に流される。幽居十九年、延応元年(一一三九)配所にて崩御。「御火葬塚」は海士町に、御陵は京都にある。
(C) 後醍醐天皇 元弘二年(一一三三)倒幕の事に敗れ隠岐に流される(西ノ島町黒木御所趾が配所)。翌年二月釣舟で脱出、京都に帰り建武の新政を布く。のち足利氏と争い、吉野山で崩御。
(註)江戸時代の流人は「村預り」制度で、村では流人に対して①離村の禁止②博打の禁止③乗船の禁止④結婚は許さず 等の禁止事項があつた。

(D) 末次平蔵茂朝 長崎代官末次平義(末次家四代) 父子は密貿易に関係した理由で延宝五年(一六七七)隠岐へ流罪。平蔵と平兵衛父子は「現西ノ島町物井」に住居。扶持米として、各四人扶持(一人扶持は玄米一ヶ月一斗五升、二十二、五K)が支給、更に若干の所持金もあり、余裕ある生活であつたが、貞享四年(一六八七)隠岐が天領となり扶持前は停止され以後は悲惨な生活であつたと言ふ。日御崎神社の神官「日置風水」が吟行の途次に村人からその暮しぶりを聞き「八十才に近い老いの身を二間四方の茅屋に住い、子息平兵衛にも先立たれ(中略)今では完全に島猿に見える」と「隠岐のすさび」に記している。

(古代山城研究会々員)

【参考資料】新編藩史総覧・続日本紀・日本歴史人名辞典・島前の文化財・流人百話・隠岐流人秘帳・OKIまるごとミュージアム。

